

一、寿福寺

松坡先生が主宰する松社の月例会（昭和十一年三月）の折に松坡先生が詠じた詩があり、その第五句、第六句には、

當日開山傳茗種

當日の開山 茗種を伝え

如今居士撚霜髭

如今の居士 霜髭を撚る

とあります。かつての開山**栄西**は茶を伝えたが、現在の居士は白い髭を撚りりながら何か難しそうなことを考えている、とでもいっのでしょう。「如今居士」は**内田智光師**です。この詩が書かれた詩軸は内田智光師に贈られ、現在も寿福寺にあります。

その内田智光師や建長寺正統院の**國立正呉師**らの求めに応じて、松坡先生を講師として寿福寺で**漢詩の講読会**が開かれました。昭和十一年（1936）年頃、**國立正呉師**が内田智光師に「漢詩の勉強をしないか」と提案し、松坡先生に指導を依頼、先生が会の名を「**晩翠会**」としました。始めは即題（その場で題を与えられて漢詩を作る）だったようですが、『清詩評注読本』をテキストにして先生が講義を行うようになりました。参加者は臨濟宗の僧を中心に十二、三名ほどで、鎌倉在住の**軍人**や**松社同人**の参加もあったようです。その講義に使用されたガリ版刷りの教材『**田邊松坡先生講本**』が残っています。鉛筆で細かい書き込みがあり、聴講者の誰かが先生の講義を筆記したものだと思われず。旧蔵者は不明ですが、綴じてある表紙の裏側に「鎌倉市浄明寺七六」との墨書があります。恐らく反故紙が使わ

れたのだと思いますが、書かれた地番は「浄妙寺」の住所です。当時の浄妙寺関係者が講読会に参加しており、その所有になった講本かも知れませ
ん。想像は膨らみます。講読会は松坡先生の高齢化により昭和十五(1940)
年頃に終了しました。

ところで、内田智光師が詠じた漢詩を私たちは目にすることができません。

それは、寿福寺総門脇にある「源実朝をしのぶ」碑(鎌倉同人会 1992)
碑陰に刻まれています。

同人會讚實朝情 建碑門頭唱至誠 海波毫趣呈推敲 春秋八百笑相迎

同人会 実朝の情を讚え 門頭に碑を建て、至誠を唱う 海波の毫趣

推敲を呈ししめ 春秋八百 笑いて相迎う

転句の「海波毫趣」、海波の力強い趣き(毫は豪と通用)が源実朝の「大

海の磯もとどろによする波 われてくだけてさけて散るかも」を踏まえて

いるのは言うまでもありません。

その寿福寺に先生と
奥様の鏝さん、早世し
た長女三千さんは眠
っています。

『田邊松坡先生講本』

(個人蔵)

